

# SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

## 減ろうが、それとも増えようが (銀行貸出残推移に思う)

今週、昨年12月時点で、銀行の貸出金減少が過去84ヶ月(年に換算すると丸7年)に及んだと報じられた。私は一寸疑問に思い日銀のデータを覗いてみた。確かに、98年1月(同月の貸出金平残は533兆円)を起点に昨年12月まで84ヶ月貸出金は減り続けていた。ただ貸出金のピークは98年1月ではなく、96年の3月の536兆円だったことが確認できた。ということは、96年から97年の2年間は増えたり減ったりを繰り返し、98年1月に2度目のピークを打っていたことになる。

そこから坂道を転げ落ちるように貸出金は減り続け、昨年12月では385兆円となった。7年間で151兆円だから、年換算で21兆円強、1ヶ月当たりで1.8兆円ほど減った勘定になる。1.8兆円と云えば、中堅地銀1行分の資金量に匹敵する。つまり、98年1月以降、毎月毎月地銀1行が日本から消えたと同じことが起こっていたことになる。

このことをどう把握すべきだろうか。

今まで何度か指摘してきたが、私が奇妙に思うことの一つは、何故貸出金のピークが96年だったのかということである。これはどう考えても不思議で仕方がない。既にバブル崩壊が鮮明となって4年も過ぎていたのに、銀行は未だ貸出金を増やしていたのだ。実に驚くべきことである。銀行経営者が脳天気だったのか、当局の方針がそうだったのかよく分からないが、バブル崩壊後の初期行動の遅れが問題を更に大きくしたと考えざるをえない。

そして今、貸出金を減らし続けてきた銀行が反攻勢に出ようとしている。不良債権処理の目処が立ったこと、余りにも貸出金が減ってしまったことがその背景にあると思うが、この動きはどう把握すべきだろうか。

一般的に云えば、喜ばしい動きと云うべきかもしれない。金融の中核にいる銀行に元気が出てきたことを素直に評価すべきかもしれない。とはいえ、過去を振り返れば「おだてに乗ってはいかんぞ」と思う気持ちは捨てきれない。

過去の延長線で考えれば、日本の銀行の貸出金残高は正常ラインに戻ったと云っていい。ピーク時で対GDP比100%を超えた貸出残高も、今ではバブル発生前のレベルである70%台に戻った。とすれば、また以前と同じように、銀行が経済の血脈を担う中心インフラとして復活してもおかしくはない。

だが、どうも違うのではないかという思いが断ち切れない。

その理由を幾つか挙げてみると、第一に経済のソフト化の進展がある。

銀行はノンリスクマネー(預金)を原資に貸出を行っているので大きなリスクが取れない。ところが、ソフト経済の主流はハイリスク企業である。土地や工場等有形なものに価値があるのではなく、無形のもの価値が生ずる経済は預金者を護らなければならない銀行には対応が難しい。現に、若者達が立ち上げているソフトや情報系企業に銀行は全く対応できていない。

第二は、系列や株式持ち合いの崩壊である。今までは、株式持ち合いを核に関係性重視の融資が行われてきた。それが、系列や持ち合い崩壊で合理性重視に変化している。とすると、従来型銀行は厳しさを増す。大企業の銀行離れが云われて久しいが、それは決して一時的なものではなく必然的な流れである。経済のグローバル化がそれに追い打ちをかけることになる。

第三は、規制緩和である。最近の動きを見ると、金融の世界の動きは激しい。大手銀行がノンバンクと接近してみたり、消費者金融が銀行の大株主になったりしている。メーカーや小売りも金融業に参画し、生保や証券との垣根もかなり低くなっている。何がどうなるのかよく分からないし、何が起こっても不思議ではないような気がするが、そんな中当局ばかり見てきた銀行が勢力を拡大するとは思えない。

とすれば、銀行の盛衰が直接的に自社の盛衰に関わるような関係の持ち方は改める必要があると思うのだ。勿論、私の見方が正しい等と云う積もりはないが、不良債権処理後の銀行の動きは中小企業経営者を再び三度おだてる可能性がある。そこには細心の注意が必要だ。

Weekly Fax Report

《複製・転載等のご連絡下さい》

URL: [http://www.hi-ho.ne.jp/smc\\_toyo/](http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/)

2005.1.15(第444号)

TEL. 0438-53-6092 FAX. 0438-53-6096

Email: [smc\\_toyo@hi-ho.ne.jp](mailto:smc_toyo@hi-ho.ne.jp)